

第9回講義 (20160624)

§6 New Relativism

1 新相対主義とは何か

2 Kaplan 'Demonstratives'

3 Kaplan の使用の文脈と値踏みの情況の区別による文脈主義と相対主義の区別

4 知の相対主義について

1 懐疑論的論証

2 「知る」の文脈主義

**Contextualist semantics for "knows."**  $[[\text{"knows"}]]_{\langle w, t, a \rangle}^c = \{ \langle x, y \rangle \mid y \text{ is true at the circumstance } \langle w, t \rangle \ \& \ x \text{ believes } y \text{ at } \langle w, t \rangle \ \& \ x \text{ can rule out all the alternatives to } y \text{ that are relevant at } c \}$ .

「知る」の文脈主義は、「知る」の意味が文脈によって変化することをみとめる。

つまり「xがyを知っている」の真偽が文脈によって変化することを認める。

例えば、

1A 「あなたはポケットに2ドル持っていますか」

2ジョン 「はい、私は2ドル持っています。」

3A 「あなたは、あなたがポケットに2ドル持っていることを知っていますか」

4ジョン 「はい、私は2ドル持っていることを知っています。」

5A 「あなたは、それが偽札でないことを判別できますか」

6ジョン 「いいえ、できません」

7A 「あなたは、あなたがポケットに二ドル持っていることを知っていますか」

8ジョン 「そうですね、そう言われたら、私はそれを知っていません」

4と8は一見矛盾するが、どちらもそれぞれの文脈では正しい発話だでしょう。文脈主義者は、4と8では文脈が異なるために「知っている／知っていない」の意味が異なると考える。

3 「知る」の主体感受的不変主義 (Subject-sensitivite invariatism, SSI)

**Contextualist semantics for "knows."**  $[[\text{"knows"}]]_{\langle w, t, a \rangle}^c = \{ \langle x, y \rangle \mid y \text{ is true at the circumstance } \langle w, t \rangle \ \& \ x \text{ believes } y \text{ at } \langle w, t \rangle \ \& \ x \text{ can rule out all the alternatives to } y \text{ that are relevant at } c \}$ .

**SSI semantics for "knows."**  $[[\text{"knows"}]]_{\langle w, t, a \rangle}^s = \{ \langle x, y \rangle \mid y \text{ is true at the circumstance } \langle w, t \rangle \ \& \ x \text{ believes } y \text{ at } \langle w, t \rangle \ \& \ x \text{ can rule out all the alternatives to } y \text{ that are relevant in } x\text{'s situation at } \langle w, t \rangle \}$ .

上記の例は、ジョンが自分の知識について述べているので、知識を帰属される人と、知識を帰属する人が同一である場合である。次にこの二つが異なる事例を考えてみよう。

MacFalane は、次のように考える。

当事者にとって掛け金が大きく、知識帰属者にとって、掛け金が小さい時には、SSI の説明がうまくゆく。

当事者にとって掛け金が小さく、知識帰属者にとって、掛け金が大きい時には、文脈主義の説明がうまくゆく。

<参考文献>

SSI:Hawthorne, John (2004). Knowledge and Lotteries. Oxford: Oxford University Press.

Stanley, Jason (2005b). Knowledge and Practical Interests. Oxford: Oxford University Press.

文脈主義者: DeRose, Keith (2004). Single scoreboard semantics. Philosophical Studies, 119: 1–21.

DeRose, Keith (2005). The ordinary language basis for contextualism and the new invariantism. Philosophical Quarterly, 55: 172–198.